

岩手県上閉伊郡大槌町 吉里吉里地区における復興まちづくりについて

二井 昭佳¹

¹ 正会員 博士（工学） 国土館大学理工学部まちづくり学系（〒154-8514 東京都世田谷区世田谷 4-28-1）

E-mail : nii@kokushikan.ac.jp

本稿は、東日本大震災で甚大な津波被害を受けた岩手県上閉伊郡大槌町のうち、吉里吉里地区における復興まちづくりについて、外部の専門家として支援してきた立場から、これまでの経緯とその概略を報告するものである。被災後から2014年度までを空間計画の進捗の観点から大きく4つの段階に分け、各段階における空間計画の特徴とそれらの関係性について述べた。

キーワード：東日本大震災、復興計画、まちづくり、空間計画、大槌町、吉里吉里

1. はじめに

本稿は、2011年3月11日の東日本大震災により甚大な津波被害を受けた岩手県上閉伊郡大槌町のうち、吉里吉里地区の復興まちづくりについて、外部の専門家として支援してきた立場から、被災から2014年度までの空間計画の経緯とその概略を報告するものである。

筆者は、2011年6月より国土交通省都市局による市街地復興パターン概略検討業務（対象地：大槌町）¹⁾に、受注者である（株）東京建設コンサルタント・（株）邑計画事務所共同提案体の協力人材として参加し、同年10月からは吉里吉里地区および浪板地区の地域復興協議会のコーディネーターとして大槌町の復興基本計画²⁾に関わった。その後も継続して両地区の復興計画のアドバイスや各種調整、また協議会のコーディネートなど、復興まちづくりの実現に向けた技術支援をおこなっている。

これまで大槌町の復興まちづくりに関しては、外部の専門家の中心人物である中井による報告^{3), 4)}があり、被災から2013年度までの大槌町全体の空間計画の経緯と特徴がまとめられている。そのため本稿では、全体の経緯についてはできるだけ簡略化し、吉里吉里地区に重点をおいて記述することとした。なお大槌町の復興まちづくりに関しては、尾崎・中井・南雲による被災直後における屋台を用いた広場づくりの実践報告⁵⁾や、福島・中井による町方地区を対象とした地域コミュニティ単位のワークショップと計画反映の報告⁶⁾などがある。

2. 吉里吉里地区の概要と津波被害の状況

(1) 吉里吉里地区の概要

吉里吉里地区は、大槌町沿岸部の主要5地区のひとつで、白く美しい砂浜の向こうに船越湾を望む風光明媚な集落である。

当地区は、明治の大合併以前には現在の赤浜地区と浪板地区を枝村とする吉里吉里村の本村だったが、明治22年に大槌村、小槌村と合併し大槌町になった。町の行政の中心である町方地区が、大槌氏の城下町や盛岡藩の代官所として古くから都市的な機能を持ち発展してきたのに対し、吉里吉里地区は盛岡藩の御用商人を勤めた豪商で、網元であった吉里吉里善兵衛こと前川善兵衛の本拠地であり、漁業を中心とする集落として発展してきた。

なお当地区の名前を一躍有名にしたものに、井上ひさし氏による小説『吉里吉里人』⁷⁾がある。これは、東北地方の小さな村である吉里吉里村が日本から独立するという、もちろん架空の話である。しかし、後述する昭和8年の三陸津波後の復興計画での取り組み、今回の津波後の地区住民による災害対策本部の設置と、道路啓開作業や救急搬送用ヘリポートの建設などの様々な活動⁸⁾に加え、復興まちづくりを通じた筆者の経験に照らしても、吉里吉里地区の人々の姿は、井上ひさし氏が描いた自助の精神に溢れ、強い団結力を持つ吉里吉里人の姿と重なる点が多く、高い自治力と強固なコミュニティを持つという点でも魅力的な地区である。

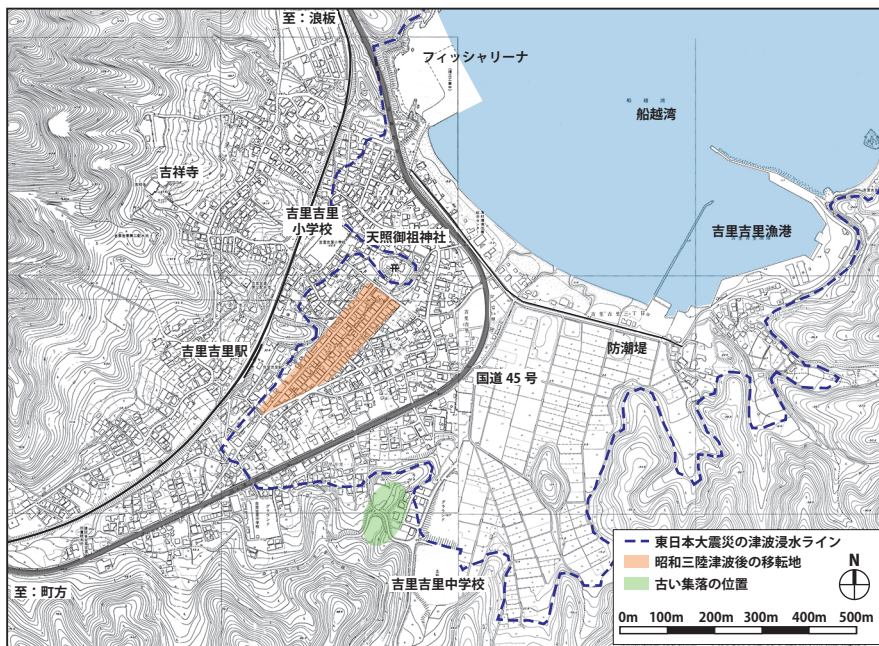


図-1 吉里吉里地区位置図（被災前の振興局金石管内図に筆者加筆）

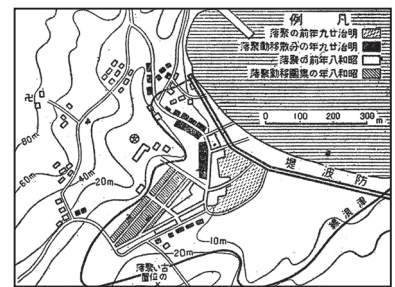


図-2 『津波と村』掲載の吉里吉里地区の集落移動図

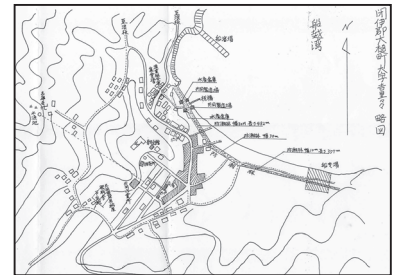


図-3 吉里吉里部落新漁村建設計画要項付図（1933年）

(2) 明治以降の津波被害と集落位置の変遷

地区集落の大半は北西部の山裾に広がるように立地し、海岸近くの一部の低地部を除けば、概ね標高10mから50mの間の斜面地に位置している。また地区の中心部は、集落の鎮守である天照御祖神社より南西側であった。ただ、古くよりこうした立地と空間構成だったわけではなく、明治29年の明治三陸津波、昭和8年の昭和三陸津波により漸次移動してきたものである。

津波から集落を守るための研究と実践に尽力した山口弥一郎は、昭和三陸津波の被害と復興状況を自らの足で調べたまとめあげた名著『津浪と村』⁹⁾で、吉里吉里地区を「吉里吉里の理想郷」と紹介し、津波被害に伴う集落移動の歴史についても記している（図-2）。これによれば、往古は山麓の高い位置に集落があったが、明治三陸津波時には海岸近くにまとまって漁村集落をなしており、津波により160戸のうち100戸が流出する大被害を受けた。その後、50戸ほどがやや高台の山麓に移転したが、飲料水や浜との行き来の不便さなどもあり、一部は低地部に戻った。そして昭和三陸津波により275戸中105戸が流出するという大被害となり、集落を永続的に守る根本的な対策として、高台への集団移動が実施されたとされる。

この高台が、図-1の天照御祖神社の南西側の整然と区画された部分である。山口によれば、ここは畑地で津波以前は坪単価5円から10円で売買されていた土地であったが、一律坪単価2円で8000坪を買収し、住宅は基本50坪（5×10間）、地主は60坪として合計98戸、これに集会場や共同浴場、水道や道路などを含む計画を実現し、「明るい理想郷建設」に到達したとしている。本計画は、『吉里吉里部落新漁村建設計画要項』¹⁰⁾としてまとめられて

いるが、この実現には大槌町役場に加え、地元の産業組合と漁業組合も大きな役割を果たしたとされ、また県内務部長をはじめとする12名の計画技術者も加わっており、行政と地域団体、専門家の協働という点でも先駆的な取り組みだったと指摘されている¹¹⁾。

なお本計画は、被災からわずか4ヶ月の間にまとめられたものであり、その内容と共に迅速さにも驚かされる。

(3) 東日本大震災による被災状況

ただ、東日本大震災による最大浸水深は、それまで最大であった明治三陸津波の10.7mをはるかに超える16.1mに達し、先述した高台移転の大半も大きな被害を受けた。津波による死者・行方不明者は97名（2014年3月時点）、建物被害は全壊355棟、半壊・一部損壊を加えると424棟（2011年9月末時点）という大惨事となった¹²⁾。

3. 復興まちづくりの経緯と空間計画の特徴

(1) 復興まちづくりの経緯

大槌町における被災後から現在までの復興まちづくりのうち、とくに吉里吉里地区の空間計画にかかわる経緯を大まかにまとめたのが表-1である。これを地区の空間計画の進捗と対照させると、大きく以下の4つの段階に分けられる。

1) 復興計画の方針と集住エリアの決定

被災から大槌町復興基本計画策定の2011年12月まで

2) 地区の骨格の決定

基本計画後から防潮堤線形変更合意の2013年6月まで

表-1 吉里吉里地区の空間計画にかかわる大まかな流れ

年月	具体的な取り組み	空間計画の段階
2011年 3月11日	東日本大震災発生(吉里吉里地区被災状況:死者・行方不明者 97人、建物被災 424棟 / 被災前人口 2475人・954世帯)	復興計画の方針と集住範囲の決定
6月	国土交通省都市局による市街地復興パターン概略検討業務開始(東京建設コンサルタント・邑計画事務所共同体(協力会社:小野寺康都市設計事務所、イーエーユー、協力人材:二井昭佳(国士館大学)) 監理学識経験者:中井祐(東京大学教授)、大村謙二郎(筑波大学教授)	
8月29日	新町長に碓川豊氏が選出 スローガンは「海の見える、つい散歩したくなる、こだわりのある『美しいまち』」	
10月～11月	被災10地区で、地区住民による地域復興協議会(隔週・計4回)(コーディネーター、町方地区:中井祐(東京大学)、安渡地区:尾崎信(東京大学)、赤浜地区:窪田亜矢・黒瀬武史(東京大学)、吉里吉里地区、浪板地区:二井昭佳(国士館大学)・永瀬節治(東京大学))、大ヶロ地区ほか:川添善行(東京大学)、桜木町地区ほか:原裕介(東京大学)各地区の復興まちづくりの基本的な考え方と地域復興協議会の計画案を決定	
12月	大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画 策定	
2012年 2月	中井教授の提案によりコーディネーターが各地区のコンセプト図を作成	地区の骨格の決定
4月	町・担当コンサルタント・コーディネーターによる地区別WG開始	
6月	【吉里吉里地区】三陸国道事務所と国道45号の移設に関する合意【吉里吉里地区】	
9月	【吉里吉里地区】復興土地区画整理事業の都市計画決定、防災集団移転促進団地(31戸)の大臣認定	
12月	【吉里吉里地区】県との防潮堤に関する協議、防潮堤の構造および線形変更の要望書を提出するものの却下	復興まちづくりの空間イメージの決定
2013年 3月	大槌デザイン会議 開始(委員長:中井祐(東京大学教授)、学識経験者委員:乾久美子(東京芸術大学准教授)、大月敏雄(東京大学准教授)、(コーディネーター、町方地区:福島秀哉(東京大学)、安渡地区、小枕・仲松地区:尾崎信、赤浜地区:窪田亜矢・黒瀬武史、吉里吉里地区、浪板地区:二井昭佳	
4月	【吉里吉里地区】県から防潮堤計画に関する協議の打診を受け、線形・構造変更に向けた協議開始	
6月～	【吉里吉里地区】地区のまちづくり計画に合致する形での防潮堤の線形・構造形式の決定 地区別WGに加え、吉里吉里地区復興計画WSの開催(計3回)	
2014年 3月	大槌デザイン会議終了、それぞれの地区の復興まちづくりの空間イメージをまとめたデザインノート完成	公共空間・公共施設の具体的な検討
7月～	大槌町9地区で、公共空間・公共施設の具体的な検討、避難計画の策定、コミュニティ戦略の立案を目的とする地域復興協議会の開始(現在も継続中) 街路空間を中心とした景観概略設計開始	
2015年 8月～	【吉里吉里地区】公民館基本設計開始	

3) 復興まちづくりの空間イメージの決定

大槌デザイン会議開始から2013年3月のデザインノート策定まで

4) 公共空間・公共施設の具体的な検討

2014年度の地域復興協議会から現在まで

次節以降では、これらの段階ごとに空間計画の経緯と特徴を述べる。なお、吉里吉里地区の復興まちづくりにおける主な関係組織・関係者は以下の通りである。

表-2 吉里吉里地区復興まちづくりの主な関係者

主な関係組織	主な関係者(敬称略)
吉里吉里地域復興協議会	会長:藤本俊明, 副会長:東谷寛一, 前川成江
大槌町災害復興室地域整備課(2011年度)	前川(那須)智, 土橋清一, 中野智洋, 小國晃也, 松橋史人(いずれも大槌町)
大槌町都市整備課吉里吉里地区・浪板地区担当班(2012年度～2015年度)	西迫三千男(堺市・2012年度前期班長), 山本智久(音更町・2012年度後期班長), 松山幹明(所沢市・2013年度班長), 加藤孝雄(所沢市・2014年度班長), 重光寛(所沢市・2015年度班長) 越田宜弘(大槌町), 尾寄昇(堺市), 坂口修(堺市), 桑谷忠史(旭川市), 富山豊(旭川市), 照井孝典(苫小牧市), 黒川彰史(旭川市), 辻本信治(堺市), 辰野藤徳(都農町), 金盛敬一(旭川市), 三橋諭(守口市), 清水輝治(県任期付), 館下秋夫(県任期付), 佐竹俊之(堺市), 山崎正太(旭川市), 勝呂和之進(川越市), 村形友和(旭川市), 大山弘明(堺市任期付), 堀田幸宏(旭川市), 齊藤祐紀(所沢市), 樋口満夫(守山市任期付), 澁川達生(岸和田市), 渡邊要寿(市川市), 伊藤和宏(旭川市), 鎌田圭亮(守山市任期付)
大槌町総合政策課(2014年度～)	平賀聡(岩手県任期付), 四戸直樹(大槌町), 三浦一彦(鹿島建設), 内城仁(岩手県庁)
計画統括各種調整	東京建設コンサルタント(前田格, 前田文章, 小市浩伸, 平井一夫, 臂徹, 兼子和彦) 邑計画事務所(石川晃, 及川一輝, 吉田基, 寺井良夫)
区画整理	日本測地設計(野邊孝男, 境田俊幸, 浅野輝敏, 小山茂, 内藤芳治)
空間デザイン	イーエーユー(山田裕貴, 西山健一, 崎谷浩一郎)
コミュニティ戦略	アルメックVPI(内山征, 木村晃郎, 津端知也)
公民館計画支援	喜多裕建築設計事務所, 木内俊克建築計画事務所, 田中雅之建築設計事務所
学識経験者	二井昭佳(国士館大学), 永瀬節治(東京大学)

(2) 復興計画の方針と集住エリアの決定

a) 検討の経緯

大槌町では津波で町長も失ったため、本格的に復興計画が動き出すのは新町長就任後の2011年9月以降である。ただそれまでも準備は進められており、同年6月より開始された復興パターン概略検討では、大槌町役場、国土交通省都市局、監理学識経験者である中井祐教授と大村謙二郎教授、計画チーム(東京建設コンサルタント、邑計画事務所、小野寺康都市設計事務所、イーエーユー、筆者)らが一堂に会し検討を始めていた。特に7月・8月には、5回の調査事務局会議、4回のブレインストーミングと集中的に議論し、復興まちづくりの基本的な考え方の整理と、特に被害の大きかった沿岸部5地区(町方、安渡、赤浜、吉里吉里、浪板)の復興構想素案を作成した。なお復興まちづくりの基本的な考え方に関わる論点は、人口減少への対応、コミュニティの維持、風景の再構築、津波防御と避難システムなどであった。

9月に就任した碓川豊町長は、住民主体で復興計画を進める方針を示し、町内の被災10地区ごとに住民で構成される地域復興協議会を立ちあげた。そして協議会ごとに町役場、計画チーム、コーディネーター(表-1参照)が参加し、上述の復興構想素案を素材に、復興計画の方針や計画案の議論がおこなわれることになった。各協議会は10月から11月にかけて隔週で4回開催され、協議会の復興計画図としてまとめられた。最終的に地域復興協議会から町に提案がなされ、それを土台に12月に町は復興基本計画を策定した。

b) 地域復興協議会での協議内容

吉里吉里地区の地域復興協議会の概要を整理したのが表-3である。協議会の進行方法は、藤本会長と相談し、できるだけ多くの人が発言できるよう、第2回はワークショップ形式、第3・4回は車座形式で実施した。

第1回協議会では、まず協議会の位置づけや復興基本方針、津波防御の考え方といった議論の基礎となる考え方について共有を図った後、復興パターンの例として、従来の地区の中心は動かさず、できるだけ山側に集約し、一部はJR山田線より山側の既存集落と接する高台に移転する案を提示した。自由討論では、山側高台の土砂災害の危険性、低地部から高台への避難路の必要性、観光を意識した防潮堤の必要性、砂浜の保全と有効活用などの意見が出されたが、復興パターン案の方向性自体を否定する意見は無く、おおむね妥当という雰囲気であった。そこで第2回では、この復興パターンをベースに、観光や砂浜の活用にもかわる防潮堤の高さの違いによる2つの案（防潮堤高さ12.8m（L1対応）と6.4m（従来高さ・チリ津波））を提示することにした。

第2回協議会では、町会ごとに3つのグループに分かれ、

表-3 2011年度吉里吉里地域復興協議会の概要

開催日時	参加人数	協議会の概要
第1回 10月16日	116名	・議論の基礎となる考え方の共有 ・復興パターン例の提示と自由討論
第2回 10月30日	70名	・防潮堤高さの異なる2案の提示 ・ワークショップ方式による自由討論と発表
第3回 11月13日	74名	・意見反映した防潮堤高さの異なる2案の提示 ・車座による自由討論
第4回 11月27日	68名	・議論内容のまとめと地域復興協議会の計画案の確定

上記の2案を素材に自由討論し発表をおこなった。第1回終了後に地区で独自検討会を開催したこともあってか、住宅地に適した高台移転候補地が提案されるなど、各グループから具体的な意見が多く出された。またいずれのグループからも砂浜の保全と海辺の賑わいの必要性が指摘された。居住地では、安全が確保されるならば盛土して元の位置に住みたいという意見もあった。一方で防潮堤は意見が分かれたため議論を継続することとした。

第3回協議会では、まず会長から1週間前に2回目の独自検討会を開催した結果、12.8mの防潮堤への希望が多いこと、高台移転の候補地や地区中心部の拡大などの議論内容が紹介された。その後1/50模型や会場の壁を用い防潮堤の高さを実感してもらった後に再度議論したが、やはり低い防潮堤への不安の声が多く、12.8mの防潮堤高さで意見がまとまった。また中心部の拡大範囲や高台の移転候補地の考え方についても概ねまとまり、次回はこれまでの意見をもう一度整理し、復興まちづくりの考え方と計画図について最終議論をおこなうこととした。

第4回協議会では、会長から3回目の独自検討会の開催報告の後、事務局が用意したこれまでの意見のまとめを確認しながら議事を進めた。中心部の盛土エリアと高台エリアを選べるよう地区住民の意向調査を踏まえて移転住宅地の規模を決定することや、地区の中心部に地区住民が利用する店舗などと一体となったオープンスペースを設けることなどが追加され、地区の復興計画図としてまとめた（図-4右）。町の復興基本計画には、協議会での議論を元に、復興まちづくりの考え方と方針（図-4左）と、復興計画図をベースとした掲載された。

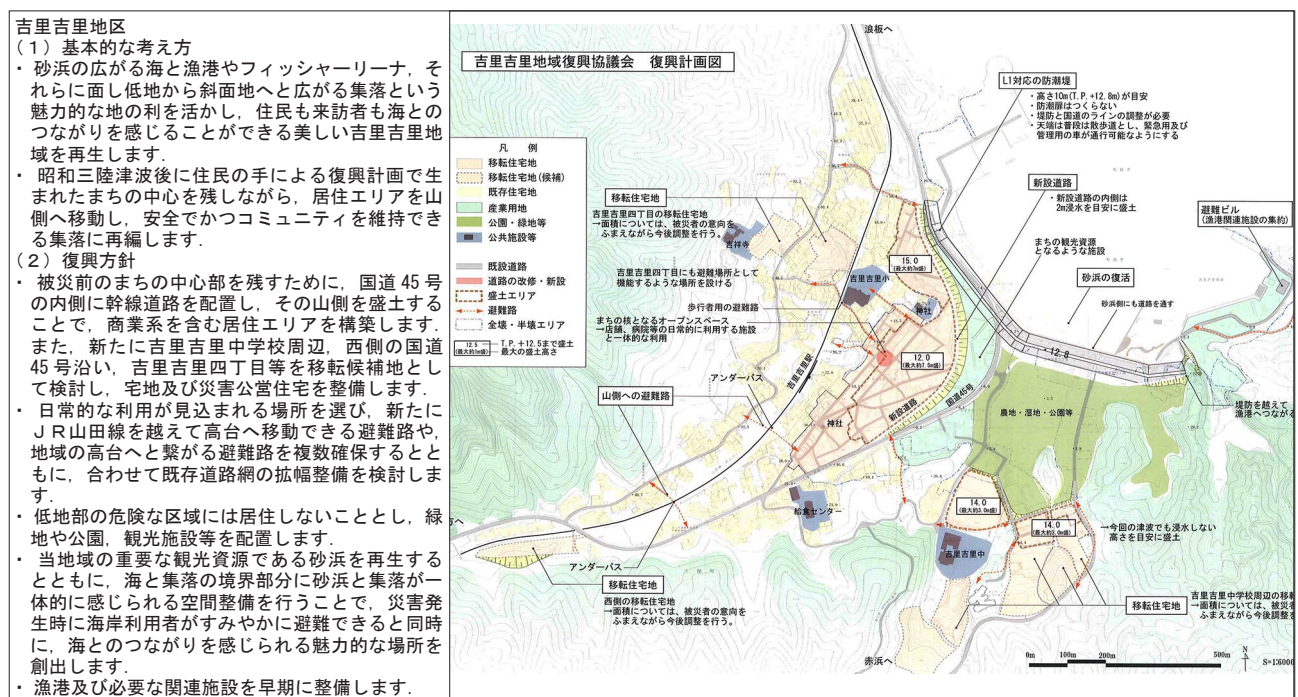


図-4 吉里吉里地区の復興まちづくりの方向性と地域復興協議会による復興計画図 ¹³⁾

(3) 地区の骨格の決定

a) 検討の体制

基本計画策定後の2012年度は、地域復興協議会での議論をベースに基本計画の具体化と、9月末を目標に区画整理事業の都市計画決定、防災集団移転事業の大臣認定等の手続きをおこなうことが目指された。それに向けた空間計画の検討は、町の都市整備課の地区担当班、計画チーム、復興基本計画時のコーディネーターで構成した地区ごとのワーキングチーム（地区別WG）でおこなわれた。

b) 骨格の考え方と決定に至る経緯

前節で述べた地域復興協議会の議論により復興計画の方針と大まかな集住エリアは決定したものの、協議会で出されたイメージを実現するには、大きく3つの課題が残されていた。具体的には、1) 山裾に集約する地区形状とそれに合わせた国道の移設、2) 海とのつながりや砂浜保全のための防潮堤のセットバック、3) 避難がしやすい地域コミュニティを維持できる地区内の空間構成である。とくに1と2は早い段階から関係者間で課題として共有されていたが、管理者との協議ができていない不確定な状況では復興基本計画に反映することができなかった。

他の地区も同様の課題を抱えていることを踏まえ、2012年1月に中井教授から、コーディネーターが地域復興協議会の議論内容を具体化したコンセプト図を作成することが提案された。その際に計画チームと協議し作成したのが図-5であり、考え方は以下の通りである。

昭和三陸津波の復興計画の区画を活かし、金刀比羅神社から海に向かう、まちと海をつなぐ道「海の軸」を設ける。この海の軸と交差し、避難場所となる高台（小学校、駅、中学校など）に通じる道「山の軸」を既存の道も活用して設ける。これにより、日常の生活動線と避難路が一致し円滑な避難行動も期待できる。また海の軸沿いのまちの中心部に、日常的に利用される店舗や郵便局などを配置した「まちの広場」を設け、コミュニティの中心となる溜まり場をつくる。さらに海の軸の海側には、国道とセットバックした防潮堤が交わる部分に平場を設け、住民も来訪者も海を楽しめる「海の広場」とする。これにより地区と防潮堤天端がほぼ同じ高さで繋がるため、海岸への行き来もしやすくなるという計画である。

結果的に、これが4月以降の地区別WGのベース図となり、区画整理の街区割りや公共空間の配置の検討、国道や防潮堤の協議などが進められた。そして、6月には国道管理者の三陸国道事務所と国道移設を前提に検討を進める合意を、さらに9月末には区画整理事業の都市計画決定、防災集団移転促進事業の大臣同意を得た。

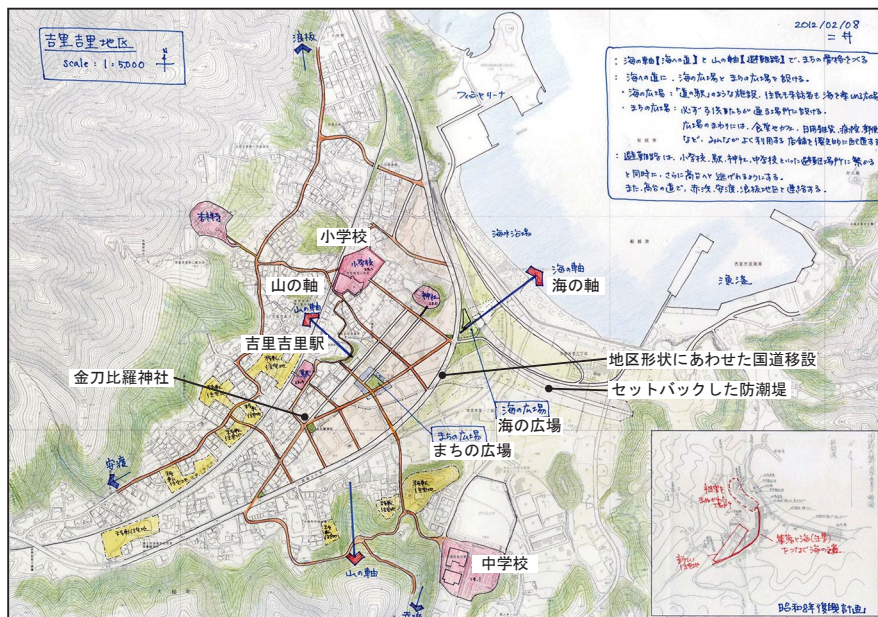


図-5 吉里吉里地区コンセプト図（2012年2月末）



図-7 吉里吉里地区全体平面図（一部抜粋・2013年6月時点）

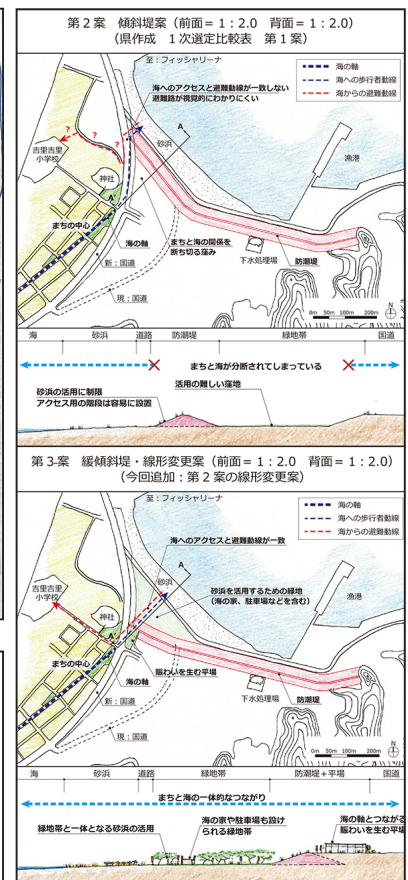


図-6 県に提出した防潮堤要望書に添付した比較案の一部（2012年12月）

一方、防潮堤に関しては11月になってようやく県から資料が送られてきたが、背面は2割勾配であるものの前面は2分勾配とほぼ直立壁であり、線形は現況と同じであった。そこで町の担当班や計画チームと相談し、海岸からの避難、地区復興計画の整合性、経済性の観点による比較表(図-6)とともに、国土交通省の「河川・海岸構造物の復旧における景観配慮の手引き¹⁹⁾」や「岩手県河川・海岸構造物の復旧等における環境・景観配慮に向けた基本的な考え方(案)¹⁹⁾」を適宜引用し、緩傾斜護岸でかつ、防潮堤線形をセットバックする計画への変更の要望書を提出した。それに対し県からは提案内容を実施する場合には町に費用負担を求めるとの回答があった。これに対し、施工費が高くなる計画ではないこと、地区の計画に協力して欲しいこと、国や県の方針とも合致することを説明したものの、回答は得られず交渉は打ち切られた。そのため防潮堤は当初の県案をもとに地区の計画と整合性を取るよう努力するしかないと考えていた。

しかし2013年4月になり、新しく着任した県の担当者が要望していた案に強い関心を寄せ、再び協議が開始された。その結果、彼の献身的な努力と町役場のバックアップ、三陸国道事務所の協力もあいまって、6月には要望していた案に極めて近い形で防潮堤の計画が進められることになった。こうして基本計画から約1年半を経て、図-7に示す地区の骨格が決定した。

なお、区画整理の検討過程や防集団地の移転候補地とその交渉の経緯については詳しく記述していないが、町の担当班と計画チームの膨大な検討作業と各種協議により決定に至っていることを明記しておきたい。

(4) 復興まちづくりの空間イメージの決定

a) 大槌デザイン会議の狙いと概要

2012年度に地区の骨格がある程度決定したのを受けて、2013年度は地区の空間計画の具体化の段階とされた。ただ、ひとつの地区でも事業主体やその内容は様々であり、個別バラバラなまちにしないためには工夫が必要であった。町役場や中井教授を中心に議論がなされ、その方法として選ばれたのが大槌デザイン会議¹⁶⁾である。これは、公共空間や公共施設を中心に、暮らしや空間の使い方も含めて議論し、地区全体の具体的な空間イメージを広く関係者で共有することで、町全体あるいは地区としてのトータルなデザインを担保しようとするものである。

会議は、各地区の代表者と3名の学識経験者で構成された全体会議(委員長:中井祐東京大学教授)と、地区住民で構成された地区別WGからなり、地区別WGにはこれまでと同様に、町役場の地区担当班、計画チーム、学識経験者がサポートすることになった。2013年3月から

ほぼ1年をかけた取組の成果は、5つの地区でA3サイズ約50ページの大槌デザインノートとしてまとめられた。

b) 吉里吉里地区の検討経緯と特徴

吉里吉里地区における開催概要を表-4に示す。当地区では12月頃には区画整理審議会で仮換地の審議が開始される予定になっていたため、それまでに地区の公共施設と公共空間の配置について地区の意見をまとめておくことが大切だと考えた。そこで、町役場や藤本会長と相談し、地区別WG会議に加えて、地区別WGメンバー、地区役員会、若手を中心とした復興計画ワークショップを8月から10月にかけて3回実施し、集中的に議論することとした。

地区別WG・復興計画WSは基本的に次のように進めた。初回(第2回)だけコーディネーターが地区のまちづくりにとって重要な場所とそのイメージを言葉で表現した議論のたたき台となる案を提示し、その後、広場や公民館、災害公営住宅や消防屯所などの公共空間・公共施設について、その配置位置や使い方、大切にすべきことなどについて発言してもらう。そして次の回では、前回出された意見をもとに構想した空間イメージを平面図やスケッチなどに表現して提示し、また意見を出してもらうことを繰り返す。この際に、それぞれの空間が地区全体あるいは他の場所との関係から議論されるように意識した。空間デザインを担当しているイーエーユー山田氏による雰囲気のある手書きの平面図とスケッチのおかげもあり、回を重ねるごとに、より具体的な空間イメージに

表-4 吉里吉里地区別WG・復興計画WSの概要

	開催日	概要
1	第1回地区別WG 2013年3月14日 (第1回デザイン会議と合同)	・会議の目的意識の共有 ・経緯説明と簡単な意見交換
2	第2回地区別WG 2013年6月26日 (第2回デザイン会議と合同)	・コーディネーターから議論のたたき台を提示 ・空間イメージについての意見交換
3	第1回復興計画WS 2013年8月1日	・地区別WG議論を反映したイメージスケッチなどをもとに意見交換
4	第2回復興計画WS 2013年9月26日	・イメージスケッチや模型などを用いて、公民館や災害公営住宅など公共施設の位置、広場や街路の位置や使い方についても意見交換
5	第3回復興計画WS 2013年10月8日	・前回の意見を反映した平面図と実例写真などを用いて、公共空間・公共施設に加え、魅力的な街並み形成などについても意見交換 ・WSでまとまった公共空間・公共施設の位置を、地区の総意として決定
6	第3回地区別WG 2013年10月17日 (第4回デザイン会議と合同)	・復興計画WSの結果をまとめた資料の確認と修正 ・これまでの議論と地区の公共空間、公共施設の配置計画案を、かわら版として全戸配布することを確認
7	第4回地区別WG 2013年11月15日	・実例写真を用いて、より具体的な空間イメージの検討と公共空間の使い方についての議論
8	第5回地区別WG 2013年12月19日 (第5回デザイン会議と合同)	・吉里吉里地区デザインノートのまとめ方の確認と追加項目の議論
-	第6回デザイン会議 2014年3月4日	・各地区の発表 ・公共空間、公共施設のデザイン方針を加えた大槌デザインノートを、デザイン会議から町長に提出

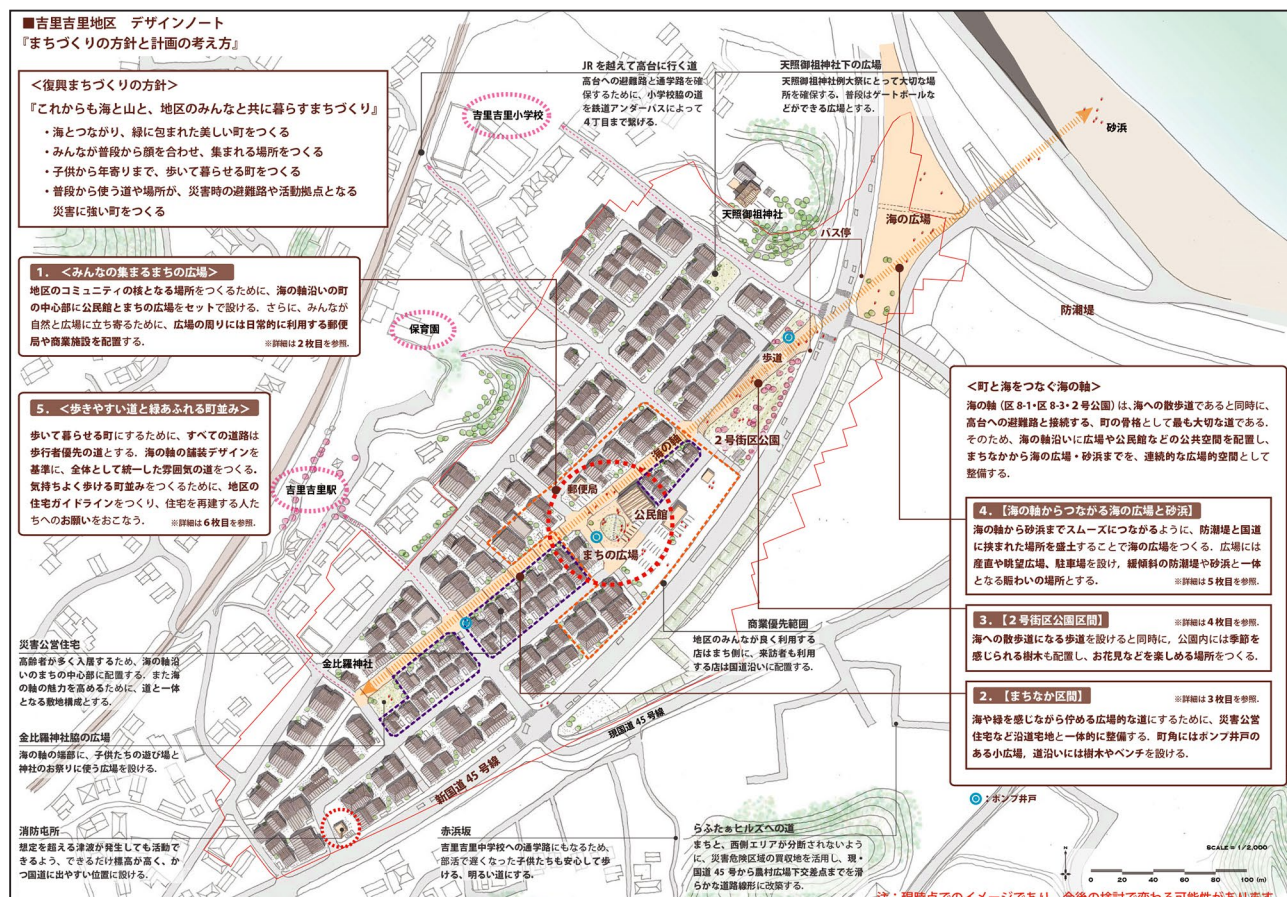


図-8 大槌デザインノート 吉里吉里地区1枚目「まちづくりの方針と計画の考え方」

かかわる意見が増えていった。その内容も公共空間にとどまらず、気持ちよく歩ける町並みに向けて屋根の色の統一や敷地境界部への植栽といった宅地側の工夫、また通りへの名付けという話にまで展開した。

こうしてまとまったのが6枚組からなる吉里吉里地区のデザインノートである。1枚目は、「まちづくりの方針と考え方」と題し、地区における復興まちづくりの方針と、5つの重要な空間（図の枠内）を中心に地区全体の計画の考え方をまとめている（図-8）。また2枚目以降は、5つの重要な空間ごとに、大切な項目を書き込んだイメージスケッチやイメージ写真に加え、テーマごとに整理したWG・WSでの意見を記載している。

その大きな特徴は、計画の考え方を活動などのシーンと共に記述している点にある。これにより、それぞれの空間の位置決定理由や大切にすべきことが、空間イメージとセットで理解しやすくなることを意図している。

作成から1年半が経過し、やむを得ない事情で変更せざるを得なかった部分もあるが、デザインノートは地区の描く復興まちづくりの見取り図として、関係者に広く浸透しており、会議構想時の狙い通りに機能していると考えている。また取りまとめ後に、地区の人々から復興後のイメージを持てたとの喜びの声もあり、その点においても意義が大きかったと感じている。

(5) 公共空間・公共施設の具体的な検討

4年目となる2014年度は、2013年度より開始されたコミュニティ再生をテーマとした地域復興協議会の継続として、公共空間・公共施設の具体的な検討に取り組んだ。また同時に街路空間を中心とした景観概略設計もスタートした。ここでは地域復興協議会について述べる。

吉里吉里地区では、上記をテーマとする地域復興協議会が4回開催された（表-5）。第1回ではデザインノートの振り返りによる地区全体のまちづくりイメージについて、第2回ではまちの新しい中心部となる海の軸、まちの広場、海の広場について使い方の観点から議論した。そのなかで公民館とまちの広場についてさらに具体的に検討することになり、被災以前の使い方や課題を議論し、子どもたちが気軽に立ち寄れる場所を大きなテーマとし検討が進められた。その結果、公民館とまちの広場がー

表-5 2014年度吉里吉里地域復興協議会の概要

開催日	概要
第1回 7月25日	・吉里吉里地区全体のまちづくりイメージについて ・デザインノートの再確認と意見交換
第2回 9月12日	・まちの新しい中心部となる海の軸、まちの広場、海の広場の使い方などの議論
第3回 10月27日	・子どもと地域住民が集まる公民館とまちの広場の具体的な空間に関する議論
第5回 2月7日	・これまでの協議内容の確認 ・海の広場とコミュニティ活動に関する議論



図-9 地域復興協議会かわら版裏面（2015年3月）

体的に使えるような空間にすること、誰もが気軽に立ち寄れる・フリースペースや縁側を設けることなどの考え方とそのイメージがまとまった（図-8）。なお現在、この方向に沿う形で、公民館の基本設計が進められている。

4. おわりに

吉里吉里地区の復興まちづくりにかかわる空間計画について概略を述べた。特徴のひとつは、途中で大きく変更されることなく、復興基本計画時の基本的な方針を維持しながら、様々な議論や調整を積み重ねて、計画がまとまってきた点にある。これは当地区というより大槌町全体の空間計画に共通することだが、その理由には関係者の努力もさることながら、住民と協働して案をまとめるという一貫した町の姿勢によるところが大きい。

この進め方は、結果的に、時間的な効果や関係機関との有利な協議結果といった副次的な効果ももたしている。例えば大槌町は2011年の秋頃には「周回遅れ」と言われていたが、その後、次第にそうした声は聞こえなくなった。また国や県といった関係機関との協議時に、地元でオーソライズされた案は、先方にとっても計画決定の拠り所にしやすいと感じることが多かった。一般的に住民協働によるまちづくりは時間がかかると言われることが多いが、復興まちづくりのような場合には逆に時間的にもメリットがあることを記しておきたい。

また議論を進めるうえで心がけてきたことのひとつは、ビジュアルで質の高い資料と平易な言葉による説明である。特にデザインノートの検討時に代表される、空間でのシーンをベースにした進め方は、具体的なイメージが湧きやすく様々なアイデアが発想される点、また計画自体もしっかりと共有される点で、あらためて有効な方法だと感じた。なおこうした資料による進め方が可能になっているのは、計画チームに空間のデザインを専門と

する設計事務所が関わっているのが大きい。

最後に、本稿では触れられなかったが、関係機関との調整や地籍の未更新など用地取得に関わる課題、区画整理事業の限界など、復興まちづくりを進める上での課題も多く感じている。これらに関しては機会を改めて報告したい。また現在、現地では造成工事が進められているが、完成までにはまだ検討や調整が必要な事項が存在しており、今後も少しでも役に立てるよう努力していきたい。

謝辞：吉里吉里地区の復興まちづくりは、地区住民や応援職員を含む町役場を中心に、計画を担当するコンサルタント・設計事務所、筆者を含む学識経験者によって行われてきたものである。本稿は、それらを筆者なりの視点でまとめたものであり、記述内容にかかわるいっさいの責任は筆者に帰するものである。関係各位には、あらためて謝意を示すとともに、これらの空間計画が魅力的な吉里吉里地区の復興に結実することを願う。

参考文献

- 1) 正式名称は、東日本大震災の被災状況に対応した市街地復興パターン概略検討業務（その6）
- 2) 大槌町：大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画，2011.
- 3) 中井祐：岩手県上閉伊郡大槌町の復興計画について，土木学会 景観・デザイン研究講演集，No.8，pp.249-252，2012.
- 4) 中井祐：大槌町の復興における各地区空間計画-大槌デザイン会議の試み-，土木学会景観・デザイン研究講演集，No.10，pp.290-292，2014.
- 5) 尾崎信・中井祐・南雲勝志：岩手県大槌町における被災者のための屋台と場のデザイン，土木学会景観・デザイン研究講演集 No.7，pp.244-245，2011.
- 6) 福島秀哉・中井祐：岩手県上閉伊郡大槌町町方地区における復興まちづくりについて，土木学会景観デザイン研究講演集 No.10，pp.293-296，2014.
- 7) 井上ひさし：吉里吉里人，新潮社，1981.
- 8) 竹沢尚一郎：被災後を生きる - 吉里吉里・大槌・釜石奮闘記，中央公論新社，2013.
- 9) 山口弥一郎：津浪と村，恒春閣書房，1943. 2011年6月に三弥井書店より復刻されている。
- 10) 大槌町吉里吉里部落 新漁村建設計画要項，1933年7月。元・吉里吉里公民館長畠山理助氏による写本を参照した。なお図-3は本計画の付図である。
- 11) 石田頼房・地井昭夫ら：集落計画，新建築学体系18，彰国社，pp.260-261，1986.
- 12) 大槌町：大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画，（改訂版），pp.88，2014.
- 13) 前掲2）より引用抜粋。
- 14) 国土交通省 水管理・国土保全局：河川・海岸構造物の復旧における景観配慮の手引き，2011.
- 15) 岩手県 県土整備部：岩手県河川・海岸構造物の復旧等における環境・景観配慮に向けた基本的な考え方（案），2012.
- 16) 大槌デザイン会議の経緯と特徴は，前掲4）を参照されたい。